

生活科では、気付きの質の高まりが深い学びであると捉えることができます。気付きの質を高めるためには、体験活動と表現活動が豊かに行き来する相互作用を十分理解して単元を構成するとともに、活動や体験の中で感じたり考えたりしている児童の姿を丁寧に見取り、働き掛け、活動の充実につなげることが大切です。

体験活動と表現活動が豊かに行き来する単元構成例

単元を構成する際には、単に活動や体験を繰り返すのではなく、話合いや交流、伝え合いや発表などの表現活動を適切に位置付けましょう。


内容(6) 自然や物を使った遊び (Aくんの気付きの質が高まった例)

体験活動1 教師が準備した見本のおもちゃで自由に遊び、作りたいおもちゃを考える。

体験活動2 材料を準備して、自分でイメージしたおもちゃを作って遊ぶ。

体験活動3 友達のおもちゃで遊んだり、友達に自分のおもちゃで遊んでもらったりする。

体験活動4 さらに自分のおもちゃの機能が高まるよう改造し、試してみる。

表現活動1 (絵・発表)
 ぼくは、この絵のようなロケットを作って、飛ばしてみたいです。


表現活動2 (発表・実演)
 ぼくは、こんなロケットを作りました。でも、もっと遠くに飛ばしたいです。

表現活動3 (交流・伝え合い)
 A: どうやったら遠くに飛ぶの?
 B: 輪ゴムを2本にしたら、遠くに飛んだよ。やってみて。
 A: 本当だ。Bさんはすごいな。

表現活動4 (発表)
 いろんな材料や方法で試して改造したら、すごくよく飛ぶロケットになりました。うれしいです。

児童を見取る基本姿勢としての「四つの目」の重視

生活科は、児童の思いや願いを活動のストーリーとしていくことから、結果に至るまでの過程を重視して行われます。多様な児童の姿を、次の「四つの目」を重視して見取り、気付きの質がより高まるような働き掛けをしましょう。

温かい目

児童と双方向の関係を築き、共感的な児童理解に基づいて見取る姿勢

広い目

様々な立場からの評価資料を収集し、多面的に見取る姿勢

長い目

児童の学びを長期的な文脈の中で見取る姿勢

基本の目

学習指導要領の趣旨を踏まえ、評価規準に照らして見取る姿勢



児童の気付きの質を高める働き掛けの例



◇言葉掛け

「そうだね」「すごいね」「どんなふうに」「どんなことをしたの」「どこが違うのかな」「～してみようか」「どんな感じかな? やってみて」などと問い掛けたり共感したりすることで、次の活動を促す。

◇共有するための話合いの場の設定

見取った内容を基に、お互いの気付きがより高まるよう、意図的にペアやグループを編成し、交流する場を設定する。

◇学習環境の工夫

材料や道具を追加するなどして、児童が学習活動に没頭できるようにする。

【気付きの質が高まった児童の姿】 ⇔ ねらいと関連

- ・身近な物で作ったおもちゃで遊べることや、工夫した動きの面白さ、不思議さに気付いている。
- ・おもちゃ作りや遊びの中で、友達と関わって遊ぶ楽しさ、友達によさ、自分のよさに気付いている。